

ルカによる福音書2章11節 「ローマにおけるダビデの町」

1A ローマ皇帝の勅令

- 1B 鉄の獸
- 2B ナザレの町
- 3B 飼葉桶のイエス

2A ダビデの血筋

- 1B 異邦人ルツ
- 2B 羊飼いのダビデ
- 3B イザヤの預言
 - 1C エッサイの根株の若枝
 - 2C 男の子からの平和

3A 見捨てられた要石

- 1B 神の御子
 - 1C 永遠の方
 - 2C 処女からの誕生
- 2B 人手によらない石
 - 1C 人の像の粉碎
 - 2C 王たちの礼拝

4A 良い土地に落ちた種

- 1B みことばの受け入れ
- 2B みことばの堅持

本文

私たちが注目したい今朝の聖書箇所は、ルカによる福音書 2 章 1 節から 20 節です。しかし、11 節だけを読んでみたいと思います。「2:11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」世界でも、日本でも、「クリスマス」という言葉は、あまりにも一般に知られています。しかし、その意味は、「キリストの礼拝」です。東方からの賢者が、幼子イエスを礼拝したこと。また、羊飼いが生まれたばかりの赤子イエスを礼拝したこと。その出来事を、世界の人々がお祝いして、共にキリストを礼拝するというのがクリスマスです。私たちが、本来のクリスマスに、立ち直れていることを幸いに思います。

1A ローマ皇帝の勅令

今、読んだことばは、御使いが羊飼いに対して語ったものです。時は、2 章 1 節にありますが、ローマ帝国の、初代皇帝、アウグストゥスの時です。「¹ そのころ、全世界の住民登録をせよ」という勅

令が、皇帝アウグストゥスから出た。」

ローマは、人類の歴史で壮大な物語を造り出したといって過言でないですね。グーグルに「ローマの歴史」と打つと、AI が次の概要と伝えてくれます。「ローマの歴史は、伝説の紀元前 753 年の建国から始まり、王政、共和政、帝政を経て、西ローマ帝国の滅亡(476 年)、東ローマ帝国(ビザンツ帝国)の存続(1453 年)、そして現代イタリアの首都としての現在まで、2800 年近く続く壮大な物語です。都市国家から始まり地中海世界を支配する大帝国へと発展し、西洋文明の法、政治、文化、建築に計り知れない影響を与え、「永遠の都」として今も輝き続けています。」まさに、「ローマは一日にして成らず」という言葉のとおりです。

その中で、ローマが共和政から帝政に変わった時に、イエスが生まれました。アウグストゥスが皇帝になったのが、紀元前 27 年です。ローマは、国々と戦い、いろいろな勢力と戦い、ついにすべてを制圧し、平和を確立していました。「パクス・ロマーナ」と呼ばれます。ついに世界に平和が来たのだ、これで人々は平穏に暮らし、しかも豊かに暮らすことができるのだ。このような救いと勝利をもたらした皇帝は、救世主のようなお方だ、とみなしました。事実、皇帝は「救い主(ソーテリア)」と呼ばれ、「平和の君」とも呼ばれました。そして彼が生まれたのは、神からの子、神の子として祭り上げられました。そして、この新しい時代に入ったことを、ユーアンゲリオン(良き知らせ)、すなわち福音と呼んだのです。

しかし、神から遣わされた御使いは、すべて、生まれたばかりの、しかも宿屋もなく、飼葉桶に置かれている乳飲み子イエスに、これらすべての称号を与えていました。「**あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。**」この方が、ソーテリアであり、主、キリストです。また、神の子であり、平和の君です。そして、聖書は高らかに、イエス・キリストが来られたことこそが、ユーアンゲリオン、良い知らせ、福音だと宣言しています。世の権力と栄光の中で、ちりのようにしか見えないような誕生です。しかし、この小さき方が、世の力と栄光を圧倒的に凌駕する、打ち勝つ方なのだと、神のことばは教えています。

1B 鉄の獣

聖書というのは、世界を動かす神の預言で満ちています。神は、何百年も前から、世界がどうなるかを前もって知らせておられます。紀元前六世紀に生きていたダニエルは、時の世界帝国のバビロンの王、ネブカドネツァルに仕えていました。王の見た夢を言い当て、また解き明かしました。それは人の像であり、頭が金、胸と両腕が銀、下腹が青銅、そして脚、両脚が鉄でした。そして足と足の指は、鉄に粘土が混じり合っていました。ダニエルは解き明かしますが、これは世界を支配する帝国の興亡を前もって伝えるものです。金の頭はバビロン、銀はペルシア、青銅はギリシアです。そして両脚は、ローマなのです。その後、足とその指が粘土が混じっているのですが、それは、ローマ以後の世界です。歴史は、ローマ帝国という空前絶後の長期に渡る帝国が出てきた後、そ

の影響を引きずりながら、今に至るまで、まとまるようでまとまらない世界となっています。

そして、ダニエル自身が、夢を見ました。荒れ狂う海から出てくる四頭の獣でした。初めは獅子、ライオンのような獣。次に熊のような獣、そして豹です。その後で、形容しがたい獣が現れました。十本の角があり、鉄の牙を持っていました。この獣は、食らってはかみ碎いて、残りを足で踏みつけていました。これが、ローマです。これまでの国の権力と栄光をすべて踏みにじる国がローマであり、事実、周囲の国々や勢力をことごとくかみ碎いて、それでパクス・ロマーナとなつたのです。

2B ナザレの町

それに対して、イエスの父と母、ヨセフとマリアはどこの町の人でしたでしょうか？ナザレです。ナザレのヘブル語の意味は、「枝」です。ネツエルと言います。イザヤは、メシア、救世主のことを、「エッサイの根株の若枝」と預言しました。エッサイとは、ダビデの父です。ダビデの家系が、どんどん切り倒され、何でもない家系になっていき、それが切り取られた根株と表現されています。そこから、若枝が出てくるというのが、キリストであると教えたのです。

ヨセフは、ダビデの末裔だったのです。「⁴ ヨセフも、ダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。」とあります。しかし、ナザレは、ナタナエルという人が、「ナザレから何か良いものが出るだろうか。(ヨハネ 1:46)」と言ったぐらい、何もない村だったのです。そしてヨセフの家は、貧しい家庭でした(ルカ 1:24 参照)。今でも、血筋はすごくとも、人目に全くつかないような形で生きている方々はたくさんいます。私たちの知人に、福沢諭吉の親戚の方がいますし、最近、徳川慶喜の孫の孫、玄孫(やしゃご)の方が、少しニュースで出てきましたね。

3B 飼葉桶のイエス

マリアは身重になっているのに、住民登録ということで、母体には堪えるのに、それでも長旅をしなければいけません。ついに、ベツレヘムに着きました。しかし、宿屋がないのです。それで、家畜のいる洞窟に来ました。当時、貧しい人々は、洞穴に住んでいて、その奥に家畜を飼っていました。その体温で、洞窟の中が少しでも暖かくなるためです。そして、その岩の下に、餌になるものを入れていました。その岩の窪みが、飼い葉桶です。世界帝国の皇帝と、イエスとの間には圧倒的な力と栄光の差があります。しかし、聖書の神は、この小さき方によって世界にご自分の王国を打ち立てることを、みこころとしておられたのです。

2A ダビデの血筋

そして、著者ルカは、皇帝アウグストゥスが君臨していることも意識して、「ダビデの町」も書いています。イエスは、「ダビデの子」と呼ばされました。それは、ダビデに対して神が、ご自分の国を治める王を、彼の世継ぎの子から出すと約束されたからです。しかし、ダビデ自身が、取るに足りな

い家系から出ているのです。

1B 異邦人ルツ

ベツレヘムがダビデの町と呼ばれたのは、ダビデがそこで生まれたからなのですが、その始まりは、ルツ記に書いてあります。時は、士師たちがイスラエルを治めていた頃です。士師記を読んだ方は分かりますが、その時代は暗黒でした。人々が、自分の目に正しいと思われることを行っていました。今の時代に通じます。一人一人が、自分の心に正しいと思われることをすればよい、多様性の時代だから、価値観を他者に押し付けてはいけないとっています。その結果、どうですか？悪に対して強く対処することができなくなつたのです。絶対悪がないのですから、対処のしようがないのです。

しかし、そんな暗黒の時代に、ルツ記に書かれている人々、神を畏れ敬う人々が出てくることは、慰められます。どんなに堕落していても、わずかであっても、主は忠実な者たちを残しておられるのです。ボアズという人は、イスラエルの神を畏れて生きていました。そこに、モアブ人のルツが、姑のナオミと共に暮らしていたのです。彼女がボアズの畠で落穂拾いをして、ナオミもルツも、どちらもやもめであることを知って、彼女に良くしてあげました。それで、ナオミがルツに、ボアズに結婚を申し出るように言いつけます。それで、ボアズは、異邦人の女だけれども、イスラエルの民を自分の民とし、イスラエルの神を自分の神としているルツを、自分の妻にしたのです。そのルツの曾孫が、ダビデになります。

2B 羊飼いのダビデ

ダビデの父は、エッサイと言いました。エッサイには八人の息子がいました。ダビデは、末の息子でした。彼は羊飼いをしていました。羊飼いは、とても地味な仕事です。卑しい仕事とも言えるでしょう。しかし、神はダビデを選び、イスラエルの王とされました。ダビデが羊を養い、また外敵から羊を守ったように、その心でイスラエルの民を治めました。

3B イザヤの預言

後に、紀元前 700 年前後に生きていたイザヤによって、ダビデの子からメシアが、すなわち救世主キリストが現れることが、預言されたのです。

1C エッサイの根株の若枝

「11:1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」先ほど言いましたように、根株から新芽が出てきて、その若枝から実が結ばれるということです。この枝が、ネツエルであり、ナザレのヘブル語名にもなっています。本当に、小さく、目立たない新芽から、多くの実が結ばれるのです。この方が世界を正義と真実によって治めるのです。11 章 3-4 節を読みます、「3 の方は【主】を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところに

よって判決を下さず、4 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。」

2C 男の子からの平和

そして、この子は男の子として生まれることも預言しました。「イザ 9:6-7 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」みどりご、赤ん坊が生まれて、この方が公正と正義によって、とこしえまで神の国を治めるのです。

3A 見捨てられた要石

神は、人が選ぶように、選ばれません。人は、能力のある者、力のある者、見目麗しい者を選びます。しかし、主は、ご自分が恵み深い方であることを現わすために、敢えて取るに足りない者、無に等しい者、弱い者を選ばれるのです。そして、世の権力者以上の力あることを成し遂げ、世の知恵のある者以上の、知恵のあることを行われます。世を救われる方、キリストも、卑しい出身から現れるようにされました。

そして、この子はダビデの子だということだけではありません。ダビデという人の子だけではなく、神ご自身の子、すなわち神ご自身であるということもお見せになっています。

1B 神の御子

1C 永遠の方

今、読んだイザヤ 9 章の預言に注目します。「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。」とあります。みどりごは、赤ん坊のことです。そして、「男の子」は、訳に語弊があります。「ひとりのお子」としたほうがいいです。そう、その後に続くのは、単なる人の子ではなく、神ご自身のお子であることが分かるのです。「その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる」ですね。不思議とは、人知では計り知れないという意味です。つまり神ご自身のことです。そして、はっきりと力ある神、そして、永遠の父とも呼ばれます。つまり、神と一つである方だということです。この方が平和をもたらす、平和の君です。

2C 処女からの誕生

それで、イザヤは、彼が処女から生まれることも預言しました。「7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」人々は、処女から生まれるなんて、ばかばかしいと言います。そんなことあり得ないと言います。その通りなのです、人間の世界ではありえないのです。しかし、そこが味

増なのです！この方は、マリアから生まれましたが、聖靈によってお生まれになりました。マリアから生まれましたが、マリアは器であり、神ご自身のお子なのです。

2B 人手によらない石

1C 人の像の粉碎

そして、ダニエルの解き明かした、ネブカドネツアルの夢のことを思い出してください。人の像の夢ですが、その続きがあります。「2:34-35 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に碎きました。35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の粋殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。」石が、鉄と粘土の足のところにぶち当たり、人の像が粉々に砕けて、その石が大きな山となるのです。

その石が、「人手によらずに切り出され」ているところが、味噌なのです。この方は、人から生まれましたが、神からの方です。人手ではないのです。そして、人の像全体を粉々にするのですが、その力を死者からの復活によって、まず現します。死んだのに、よみがえるからです。この世の力強い王たちが、死に打ち勝った者はいるでしょうか？アウグストュスは、死に打ち勝ちましたか？いいえ、死こそが、人のどんな力も抗うことのできない力を持っています。しかし、イエスはよみがえりました。それでロマ 1 章には、こうあります。「1:3b-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる靈によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

2C 王たちの礼拝

そして、大きな山となるというのが、夢の最後ですが、よみがえられたイエスは、天に昇られ、今、神の右の座に着いておられます。そして、再び来られて、神に反抗する世の国々をことごとく打ち碎かれ、神の王国を打ち立てられるのです。「詩 2:10-11 それゆえ今王たちよ 悟れ。地をさばく者たちよ 慎め。11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ 震え 子に口づけせよ。」王たちが、神の御子に口づけします。おそらく、足に口づけします。これは、完全に屈服して、ひれ伏している姿です。

4A 良い土地に落ちた種

私たちは、この希望に支えられています。ユダヤ人たちは、当時、ローマの強権に虐げられていました。ローマは栄え、力に満ちていましたが、ユダヤ人たちは虐げられていた中で、キリストが来られる希望を抱いていました。そして、事実来られたのです。しかし、来られた時には、とても卑しい姿で来られたのです。それでも、羊飼いは御使いに示されて、この方を拝みに来ました。この方が、実に、王の王、主の主となられます。

イエスは、キリストとして、また神の御子として、その卑しい姿、しもべの姿を貰かれました。そして、十字架の死にまで従われました。それは、神に対する罪を、身代わりに受けるためです。そして、三日目によみがえられたのです。この方を、事実、キリストとして、自分を罪から救う方として信じて受け入れるならば、キリストが王となる神の国に招き入れられます。正義と平和に満ち、悪が退けられた国です。

世においては、当然ながら、大きな声が受け入れられます。影響力のある人々のところに、人は集まります。そして世は、権力者によってやりたい放題されています。ニュースを見れば、暗い話ばかりです。住みづらくなっていることは、明らかです。聖書は、そのようになると、はっきりと告げています。実に、天も地も過ぎ去るとあります。しかし、キリストによって一新してくださいます。

1B みことばの受け入れ

ですから、小さなこととして過ぎ去らせることは用意です。まことのクリスマスの話、このイエスの誕生について、過ぎ去らせることは実に簡単です。25日を過ぎたら、日本では次に大晦日、そして正月には初詣です。人生において、まじめにクリスマスをする人々はごくわずかです。

しかし、イエスはこのことを前もって知っておられ、たとえを語られました。神のことばは、聖書に書かれていることは、種蒔きの種のようであると。とても小さい種です。けれども、良い土地に落ちれば、三十倍、六十倍、百倍の実を結びます。小さきイエスが、世界に影響を与えて、実にすべての人がこの方を王とする時が来るよう、この方を自分の主として受けければ、自分自身も、その中に入ることができます。

それで、良い土地のような心になりなさいと勧めています。「8:15 しかし、良い地に落ちたものは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかりと守り、忍耐して実を結びます。」立派な良い心でみことばを聞く、とあります。要は、しっかりと聞くということです。マジで聞くということです。自分のものとして、本気で聞くということです。そして、行動に移すことです。すなわち、イエスが事実、自分の罪から救う方、救い主として心から受け入れ、信じ、この方を主として言い表すことです。180度、自分中心の生活から、イエスを主とする人生に転回することです。

2B みことばの堅持

そしてもう一つ、「それをしっかりと守り、忍耐して実を結びます」と言われています。しっかりと守ります。イエスを信じたといって、バプテスマ、洗礼設けているのに、みことばから離れていく人々は、残念ながら、数多くいます。みことばを受け入れるだけでなく、それをしっかりと握っていることです。そして忍耐することです。それでようやく、本当に信じていることが証明されます。すでに、自分はクリスチヤンだと言っている方々にとっても、クリスマスはチャレンジです。